●春日部市民文化講座（第 42 回）　「利休七哲高山右近 ―熊倉功夫氏の視点」

◆日時：2023 年 7 月 26 日(水)　10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■利休七哲高山右近 ―熊倉功夫氏の視点

今日のテーマ「利休七哲高山右近」は、ぼくがずっとライフワークとして研究してきた一部ですので、お話のあとに皆さんからのご質問があれば嬉しく思います。資料は表千家の同門誌『同門』からのコピーです。表千家が即中斎宗匠の頃からずっと信頼され、支えてこられた学者の熊倉功夫先生が書かれた資料で、その熊倉先生が、利休七哲を書き始めたのですね。今は細川忠興について書かれています。その高山右近を基にしてお話を進めます。

◆人は何で生きているのか、何で死ぬのか

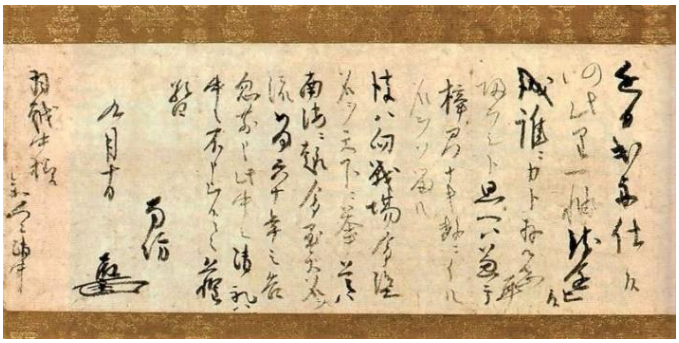
冒頭に私事からお話しますが、この春に、私は旅行で奥日光の温泉に行って、呼吸がおかしくなって救急車に乗せられて病院に運ばれてしまったのです。山の上から温泉の車で送ってもらい、下から来た救急車に途中でバトンタッチしてもらって病院に運ばれたのです。その間、ぼくはお祈りをしていました。「主の祈り」というものでした。その後、春日部のかかりつけの病院まで運ばれて治療を受けて 20 日入院しました。今日はこうしてお話させていただきますが、車の運転をはじめさまざまな制約を受けながらの生活です。そうした中で、私が考えたことは、戦国時代の武将たちが何で生きていたのか、何で戦ったのかということです。これは戦国時代のインテリたちの哲学でした。彼らは体系的な思想を持っていたのです。そういう戦国時代の人たちの思想が文章として残っています。特に今日のテーマの「高山右近」という人はそういう人でした。今日は熊倉功夫氏の文章を通じて「人は何で生きているのか、何で死ぬのか」ということを考えてみたいと思います。

◆高山右近が遺した思想

人は必ず死ぬのですが、何のために死はあなたに近づいているのでしょうか。それが戦国の武将たちの哲学であったのです。だって彼らはいつ死ぬかもわからないのですからね。高山右近が悩んだのは、高槻で戦さに出るたびに自分の愛する者たちが死んで行ってしまうのです。そんな彼の純粋な心は、キリシタンや宣教師と出会って、父親に習って洗礼を受けたことで救われるのです。

そんな高山右近の思想の一端を見ることができるのが、**『日本訣別の書状』**です。彼は秀吉からバテレン追放令が出されて小豆島や肥後国で隠れ、前田利家の金沢で匿われて客将となりますが、徳川幕府になり禁教令が出されていろいろなことが規制され、最後は「お前なんか日本人じゃないから、そんなにキリスト教が好きならば宣教師と一緒に国外追放じゃあ」と言われてマニラまで行ってしまったのです。そんな中で、彼が最後に書いたのが、この『日本訣別の書状』です。

◇日本訣別の書状



近々、出航いたすことになりました。
ところで、このたび一軸の掛物をさしあげます。
どなたにさしあげようかと思案しましたが、やはりあなた様にこそふさわしいもの、私のほんの志ばかりでございます。
帰らじと思えば兼ねて梓弓無き数にいる名おぞ留むる。彼（正成）は戦場に向かい、戦死して天下に名を挙げました。
是（私）は、今南海に赴き、命を天に任せて、名を流すばかりです。いかがなものでしょうか。
六十年来の苦もなんのその、いまこそ、ここに別れがやって参りました。先般来の御こころ尽くしのお礼は、筆舌につくす事は出来ません。
恐れながら申し上げます。
　　九月十日　　南坊等伯

◆『日本訣別の書状』

細川忠興に宛てたこの書状が、今から約 50 年前に細川護熙さんのお父さんの細川護貞さんが世に出していいと言ってくれたので、こうして見ることができたのです。ぼくは、その時に泣きましたよ。国外追放され死をも覚悟している右近が、「忠興さん、私の人生をどう思う」と書いているのです。凄い文章ですよね。でも、この書状が 400 年間にわたって細川家の永青文庫に眠っていたのです。それが突然、世に出てきたのです。突然出てきたというのがとても変なのですね。この書状の冒頭には、あなたに持ってきた軸を差し上げますと書いてあるので、ぼくが永青文庫の学芸員の方に「ここに書かれている軸は特定されましたか」と伺ったことがあるのですが、「今も研究しているのです。これを私の論文にしようと思っています」という返事がありました。まだ分かっていないのですね。

高山右近という人は、死ぬ間際にも、自分と共に戦い、一緒にお茶をした忠興に最後の最後に「さよなら」の手紙を書いたのです。遺言状のようなものですね。「俺の人生を忠興君、どう思う」と問い、**「如何に」**という字が書いてあるのですよ。これは泣きましたね。そして、私は細川護熙さんが作られた黒茶碗を求めた時に、「このお茶碗に銘を付けてほしい」と頼んだら、彼が「えっ」で言うものですから、「『如何に』という銘を付けて」と言ったら、「あぁ、いいねぇ」と応じてくださったのが、ぼくの手元にある黒茶碗『如何に』なのです。

◆何のために生きているのですか？

突然、「あなたは何のためにお茶をやっているんですか、何のために髙橋牧師の話を聴きにきているのですか、何のために生きているのですか」って真面目に尋ねられたら、あなたはどんな言葉で綴りますか。あなたは自分の言葉を持っていますか。これが今日の最終的な話の結論になるのじゃないかと思うのですね。

ぼくは、日光から高速道路もタダで春日部まで救急車に乗って帰ってくる間で学んだことは、「お祈りする人になる」「礼拝者になる」ということでした。今までは、多くの人たちにあれやこれやと説教していた人が、説教を聞く人になってしまったのです。話したくても話しちゃダメ、行きたくても行っちゃダメって、周りから規制される身になってしまったのです。そういう中で、私の人生は何なのかって思うようになり、何処に向かっているのか、生きている意味は何なのか、死んだらどうなんだろうか…というようなことを本当に考えさせられました。

◆『江岑夏書』から読む高山右近

利休七哲という言葉は、実は表千家の４代目宗匠の江岑宗左（こうしんそうさ）という人が書いた**『江岑夏書（こうしんげがぎ）』**という書物にあるのです。利休さんの話を利休さんの子・少庵、さらにその子・宗旦（3 代目）から聞いてまとめた言伝えが『江岑夏書（こうしんげがぎ）』です。

この『江岑夏書』では、利休七哲の第一は蒲生氏郷とし、第二に高山右近を挙げているのですが、今日の資料の熊倉功夫さんの視点では「なぜ右近が二番目にあげられているのか不明ですが、おそらくその人格が高潔で、茶の湯に対しても真剣にとりくみ、人びとから尊敬されていたからではないかと思います」と書かれています。熊倉さんなんて言ったら、大先生ですから叱られるかもしれませんが、ぼくは若い頃から知っていて「熊倉さん」と言い続けてきたので許してください。その熊倉さんは、資料の中で高山右近の高潔さが普通の人よりも勝っていたという視点から書いています。

江岑宗左は蒲生氏郷が第一だと書いているのですが、この理由を熊倉さんは確か書かれていないのです。ぼくはこの講座で何度か申し上げてきましたが、蒲生氏郷は少庵を救った人なのですね。千利休が切腹を命じられて、少庵も蟄居します。その時に蟄居先として匿ったのが会津の蒲生氏郷ですから、命の恩人であり、千家の茶道が存亡の危機にあったときに守ってくれた恩人なのですね。そして、利休が亡くなってから３年後には、徳川家康と蒲生氏郷が天下人の秀吉にとりなして、少庵は京都に戻ることができ、千利休の弟子として千家再興を果たし、少庵の子の宗旦を還俗させて、その後、三千家ができるのですからね。蒲生氏郷は確かに利休の弟子であり、少庵を助けて表千家を救った実力者ですから第一に置いたのだと思いますね。しかも、蒲生氏郷が生きていたら彼が天下人になったと言われるくらいの人物だったのです。ですから、あんな会津の殿様で終わるわけはなかったと言う人も世の中にはいるのです。蒲生氏郷は、初期の表千家に大貢献した人なので、少庵も宗旦も、蒲生氏郷が一番だよねって言っていたと思いますよ。千利休はこうした切腹後のことを知りませんからね。そして、二番目はやっぱり高山右近でしょうと言うのが、この流れなのですよ。

◆キリスト教徒としての高山右近

でも、ぼくの視点からすると、何で高山右近が蒲生氏郷の下になったかというと、高山右近が熱心なキリシタンだったからなのです。この『江岑夏書』が書かれた頃は、家康の時代になっていて禁教令が敷かれていて、キリスト教は邪教で、キリシタンは人間として認められていないので追放されたのですね。そういう時代になっていたのです。

この資料にある高山右近の絵って凄いでしょう。これは大阪玉造教会の立派な礼拝堂の正面壁に描かれているのですが、素晴らしく魅力的な絵です。高山右近がキリシタン大名として力を得ていた時に、彼は高槻の城主でした。その城主になる前に和田惟政（わだこれまさ）という人がいました。この人の家は、近畿一帯を納めている有力豪族の一族で、足利幕臣として織田信長との外交等の功により高槻城の城主になるのです。この時は、高山友照と右近の親子は、和田家の家臣として仕えていたのですね。しかし、戦国時代でしょう。和田惟政は荒木村重によって殺され、その子・和田惟長（これなが）が城主になるのですが、家臣から言われて高山親子を殺そうとして、逆に打ち取られるのですね。

そして、和田家を追放した高山家が高槻城主となるのです。右近が 21 歳の時でした。その時に戦った和田惟長は高山右近の竹馬の友だったのに、高槻城内でお互いに戦い、傷つけあって惟長を殺してしまうのです。高山右近のこの行為をどう考えるかは、カソリック教会が「福者」に任じる時にも問題になりました。でも、2015 年に日本のカトリック中央協議会は「高山右近は、地位を捨てて信仰を貫いた殉教者である」として、福者に認定するようローマ教皇庁に申請し任じられましたが、このことについては、誰も何にも言っていません。私の知り合いのカソリックのリーダーの方は、「髙橋さんは、あの本の中での和田惟長の死のことについてよく書いたね。それは評価するよ」と言ってくれました。この資料の中で、熊倉さんは高山右近がキリスト教徒であり、信仰者としての茶人であるということについて評価はしているのでしょうが、少し足りないのかな、時代の流れに沿って書かれているのかなというのがぼくの視点です。

◆すべてを捨てて礼拝者として死んだ高山右近

ここでぼくが申し上げたいのは、高山右近はキリスト教徒として千利休に仕え、利休の死ぬ姿を見て、自分も利休に負けないような死に方をしたいと思って全部を捨てて、日本人であることさえも捨てて、宣教師たちと一緒にマニラに行って亡くなるのです。

一方の為政者・家康が凄かったことは、高山右近を殺さなかったことです。だから面白い小説が生まれるのですね。今やっているでしょう「どうする家康」っていうドラマ、殺すか殺さないか…どうするか。これがぼくの視点です。家康が殺す気になったらいつでも殺せたのですね。でも彼は殺さなかったのですね。それが家康の凄さでもあるのです。視点の広さとも言いますか。

高山右近は、政治家として城主を捨てました。お茶を飲めないマニラに行くわけですから茶人も捨てました。ですから、小倉に居た細川忠興は長崎に居る高山右近にいろいろなものを贈っているのですね。そうしたことに感謝して記したのが、礼状である『日本訣別の書』なのですね。

そして、長崎から彼は宣教師たちと一緒にぼろぼろの船に乗ってマニラに向かうのです。行く手には何が起こるか分からない、先の読めない中で普通に航海するよりも倍以上の船旅で難儀をしながらもマニラに到着するのです。そして、マニラに到着して 40 日目には死んでしまうのです。その時に一緒に居たモレホンという司祭は「彼は礼拝者として死んだ」と、何にも言わずに亡くなったと記しています。

どうだ君たち、君が死ぬときはどうなっている。ぼくは救急車の中で、ずっと考えていました。いままではあれもこれもできたのですが、今は規制されてできないのです。酸素がほしいよと言っても、山道で救急車と出会うまでは酸素も無かったのです。そういう経験の中で、「いったいぼくは何のために生きようとしているのか」「この命は何のためにあるのか」と本当に考えました。そして、今更ながらに感じたことは、「そうか、ぼくから全部が取り除かれても、お祈りはできるなだなぁ…」ということでした。これは、ぼくがお濃茶を学んでいるときに、お濃茶って三口半で飲むんですが、何で三口半なのだろうと考えていて、「御父の憐れみ、御子の贖いの事実、聖霊なる神様の御霊のとりなしの上に、今日こうしてお茶が飲めることを感謝します。そして、こういう感謝があなたも知らない人々のところにも今及んでいる、御父の愛が溢れている。イエス様の十字架の罪の許しが覆っている。そして聖霊なる神様のとりなしの上に生かされている。あの嫌なやつもそうなんだ。」と祈りながらいただくのです。いやなやつっているのですよ。でも、そいつのために祈っていたらいやなやつじゃなくなったのですね。祈りって凄いですよ。そして半は「御父なる神、御子なる神様、聖霊なる神様、アーメン」ですよ。

◆高山右近の明石転封

天正 13 年（1985 年）、朝鮮出兵の頃に、秀吉は高山右近を高槻城から明石城への転封を行いました。それは彼の数々の武功に対する褒美としての加増もありましたが、武将たちに秀吉の天下であることを知らしめることと、高槻領民の 1/3 の 6 万 3 千人くらいがキリスト教徒になっていったことが挙げられます。天正 5 年（1577 年）に高槻では、教会も造られていました。その頃に亡くなった人たちのお墓が 20 年位前に発掘されて、キリスト教徒のお墓だったということが分かったのです。しかも、それが城内に造られていたのです。高山親子は、キリシタンもそうでない人たちも平等に葬ることにしていたのです。そういうことが高槻の資料から分かってきたのです。

しかし、残念なことに高山右近がキリシタンの茶人だったということが、お茶の世界では評価されていません。彼がキリシタン大名であり、立派なキリスト教徒であったということは言われていますが、千利休の茶の湯と高山右近の茶の湯が、同じ「侘茶」の中でピタッと寄り添っていたという歴史については、ほとんど評価されていません。ここが、熊倉さんの視点の弱点です。これから新しい発見があれば、私たちの知っている千利休の茶の湯がキリスト教の信仰に非常に近いものだということが証明されてくると思います。ただ、そういう文章や証拠が徳川幕府の時代に全部否定され、消されて燃やされてきたので、国内には残っていないのですね。

◆すべてが変わった本能寺の変

天正 10 年(1582 年)に本能寺の変が起こるわけです。この本能寺の変によってすべてが変わったのです。本能寺の変によって、堺の商人たちから買い集めた唐物(からもの)などの名物が全て焼けてしまったのです。名物が無くなってしまったので、茶入や茶碗も新しい美意識の中で国内で作られる和物(わもの)が流行していくのですね。そして、長次郎の赤や黒が焼かれ、萩や唐津という朝鮮半島から来た陶工たちの手で焼かれた陶器などが茶の湯の主流になっていくのですね。ですから、天正 10 年に茶の湯がすっかり変わったのです。革命的なことが起こったのです。 そして、秀吉の時代になり、高山右近を高槻の城主にしておいたら、領民だけでなく多くの日本人がキリシタンとなり、俺が天下人として国を抑えられなくなるという危機感の中で、秀吉は右近を高槻から追い出しました。そして、天正 13 年に朝鮮出兵の最中にバテレン追放令が出されるのです。

◆審美眼を持って

この時代の茶の湯は、堺の商人たち、そして博多の商人たちとお金持ちの嗜みでした。でも、本当に茶の湯を楽しみたいのであれば、茶碗ひとつでできるのですね。そういう人も利休の時代にはいたのです。釜ひとつ、茶碗ひとつでお茶会をやる、それでも人が来てくれた。そこにあるのは、その人の「侘びの心」ですよ。 「侘びの心」というのは、流儀がどうの、家元がどうこうではなく、髙橋敏夫という一人の茶人の心を差し上げるということなのです。ですから、今日皆さんに差し上げるお茶は山田豊のお茶の心になっているでしょうかねぇ。お菓子はどうでしょうかねぇ。見てくれとか、値段とか、誰が持っていたからではなく、自分の**「審美眼」**ではかってください。審美眼というのは、茶の湯の中で最も大切なエネルギーです。それを見て良いか悪いかを見抜く力です。そのためには、それぞれの先生が、茶人として本物かどうかを見抜く、人を見る目が大切です。それは、その人が着ている物、持っている物、立ち居振る舞いに人格として現れますからね。茶の湯というのは、相手の人格を飲む、いただくことなのですよ。

◆人間的信用を失った人のお茶は飲めない

バテレン追放令を出した秀吉は高山右近を改宗させるために、ころぶように高山右近の所に千利休を送るのです。利休さんは「まぁ、いろいろあるけれども、日本人の武士としては形としてころんでおけよ。そして、あなたは心の中で信仰を守ればいいじゃない」と言うのですよ。それが宣教師側の記録に残っていたのです。そこで「ころびましょうか」と言った右近に対して、千利休は言ったのですね。「それもよろしいでしょう。しかしそうしたら私はあなたのお茶を飲むわけにはいかないでしょう」と、人間的信用を失った人のお茶は飲めないと利休さんは言ったというのです。

◆バテレン追放令後の高山右近

資料の中で熊倉さんは、バテレン追放令が出た結果、高山右近がどうなったかを書いています。バテレン追放令が出て、高山右近は一夜にして逃亡者になるのです。最初に小西行長の領地であった小豆島に逃れます。高山右近と宣教師たちは、小豆島でもとんでもない場所に隠れていました。今、そこに行くとハート型の蹲踞とか、キリシタン灯籠なんかが残っているのです。そして、九州肥後国(現在の熊本)に逃れ、最後は前田利家の招きで客将として金沢に行きました。そこで、右近は茶の湯三昧の日々を送るのです。そこで 26 年間にわたり、追放されながらも前田家の庇護のもとで安穏として自由な時間を過ごすことができたのです。ただ調べてみると、今では高山右近の屋敷跡とか、すべての足跡が消されているのです。逸話は残っていても資料には欠けているのです。

前田利家の客将になった高山右近は、天正 18 年の小田原の北条攻めでは、前田軍の奉行として活躍しています。八王子城での攻めでも、彼の汚点があります。それは、八王子城攻めの中で前田軍の虐殺に手を貸しているのですね。ただ、そのことは殆ど発表されていません。今回、カソリック教会で彼を「福者」に任ずるときに、その辺りのことは消されています。高山右近の人としての弱さもあったと思いますし、戦では人としてどうなのと思うようなこともせざるを得なかったのかもしれません。

◆自由を失わなかった高山右近

その後も右近は金澤と京都にある屋敷を行き来していました。金沢だけでなく京都でもみんなと一緒にお茶会をしていました。彼の生涯は 63 年です。千利休が 70 年ですから短かったのですよ。本当に若くして天に召されていきました。でも、彼は 26 年間、さまざまな制限がありましたが、彼は自由であったのです。制限される中でも、彼は自由を失わなかったのですね。それは礼拝者としての右近の性格を育てていったのです。

さぁ、皆さん、最初のクエスチョンに戻りますよ。「あなたは、何で生きているの？」「何で食べているの？」「何で死ぬの？」です。皆さんそれを考えましょう。それが茶の湯です。それが、千利休の茶の湯の思想を受け止めたキリシタン高山右近の茶の湯でした。熊倉功夫先生は、表千家の公認の学者先生ですが、本日の資料を読む限りでは、ぼくが申し上げてきたようなことが欠けているのです。キリシタンとしての茶の湯の視点なのですね。

髙橋先生は「お茶はお客様に人格を差し上げるもの、亭主の人格をいただくもの」とのお話がありました。